

1

## 学習者の多様性を生かした日本語授業のデザイン —「中級日本語」の新設と TA の活用—

日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部教授  
丸山 千歌

○丸山 中級日本語についてお話ししたいと思います。お手元に、こういう感じの資料があると思うんですが、こちらをご覧ください。私の方から、まず日本語の、中級日本語の科目の新設と、その TA の活用ということを考えて、日本語授業のデザインについてご報告をしたいと思います。

今年度も、特別外国人留学生ですね、交換留学生なんですけれども、大勢立教に迎えています。9月9日現在で見えますと、新しく迎えた学生と、それから先学期から継続している学生で、大体 158 名くらい、placement test を受ける。Placement test を受けるということは日本語科目を受けたいという風に考えている人たちなんです。その学生たちが 158 人くらい。大体その学生たちが、延べどんな風に、何コマ位取っているかということ、この 158 人、2～2.5 倍くらいの掛け算をすると、学生たちが取っているコマ数になるということですね。沢山の日本語科目を受けているということが分かります。【スライド②-2】

日本語教育センターの日本語科目というのは、こんな形になっているんですけども、これは新しい科目ができる前ですね。基本的にレベル別、下からゼロレベルというのがあって、あって、0 から 1、2、3、4、5、6、7、8 という風に、全部で 9 段階のレベルがあるんですけども、レベル別、そして総合クラス、技能クラス、内容重視クラスという風に、綺麗に四角は、全部マスで整理できるような、こんな形でカリキュラムを、プログラムを組んでいます。【スライド②-3】

こういった科目の配置の仕方というのには、良いところと、それから課題と、両方あるんじゃないかな、という風に感じます。一つは、レベルごとの科目展開

というのは、個々の学生が限られた時間で効果的に話し合う、それから、文型を学ぶことができる。そういうことを狙ってるシステムですので、特に初級レベルの学生、それから日本語能力試験を受験する学生とかには、本当に効果的に学習が進められる、そういう仕組みではないかと思います。ただ、一方でもう一つ、彼らが生きている日本語の社会というのを見てみると、実は全然レベルなんて配慮されてなくて、自分よりも、自分が学んだことがない語彙や文型っていうのが社会の中に溢れている。その中で、どんな風にサバイブしていくか、というのが学習者、特に日本で日本語を第二言語として学んでいる学習者にとっての現実がそこにありますので、その現実の社会の中でコミュニケーションをどんな風にやり抜いていくのか、ということですね。そういうことが一個課題になっていて、そういうことに挑戦するような科目だってあってもいいんじゃないか、というような考え方があります。**【スライド②-4】** その考えの中から生まれてきたのが、この日本語中級という科目でして、この緑でマークしてある科目ですね。全部中級の学生を対象として、3つのレベルの学生が学ぶことができる。だから、考え方としては、下のレベルの学生は、自分が知らない語彙とか、文型を使って話す学習者と遭遇する。上の学習者にとっては、下の学習者に教えてあげる、というようなことができる、相互の学びというのできるような、そういうクラスのデザインになっています。**【スライド②-5】**

この科目は、週1回で前期に2科目、後期に2科目、年間4科目走らせていくんですけども、コンセプトとしてはこんな感じで、レベル差、それからニーズ、背景とか、色んな学習者の多様性を活かしていこうということが一つ。レベル間を跨ぐということですね。それからもう一つは、現実世界の日本語のコミュニケーション力を高める、学習者が実際に教室の外で触れている社会の中で、サバイブする力っていうのを考える。それをそれぞれの日本語能力を伸ばす新しい科目を考えようという風にしたいのが、この科目だということですね。**【スライド②-6】**

この科目を実現させるためには、3つの仕掛けがありました。一つは、コンピュータを使った形で、教室外での学習支援をするということ。それからもう一つは、教室の中で使う主教材も工夫するということ。それからもう一つが、TAを活用するという、3つの仕掛けです。**【スライド②-7】**

今日はその仕掛けの1についてはパッパッと触れていきたいんですけども、

教室の中で使う教材というのを、まずテーマ設定を日本の文化や社会に関するものにするということで、学習者が最大公約数で見た時に関心がある話題ですね、それを扱う。それから、一学期に2コマずつ、という風にお話ししたんですけども、その2コマを、一つは読解、一つは聴解中心という風において、バリエーションを持たせるということをお話ししました。それから、学習者が3レベルに跨っているという話を先ほどしましたけれども、その学習者に合わせた教材を開発するということをしていきました。内容については後ほど、藤田先生、それから、谷先生からお話があると思います。それからこちらの URL にアクセスしていただくと、中が見られるんですけども、各履修者の語彙、それから文型のレベルに合わせた教材開発をしまして、これを授業外の宿題にするという形で、個別に自分のレベルに合った教材で学ぶということですね。【スライド②-8, 9】

この今日のメインのところですね、仕掛けの3番目がこれなんですけれども、TA を活用した授業というのを考えていて、一つは、その授業活動補助として入ってもらえただけでも、一つ目は、日本語教育を専門とする人として入ってもらえ。それからもう一つは日本語母語話者として入ってもらえ。それから、日本文化を背景に持つ立場で教室に入ってもらえ。それからもう一つは、学習者目線と同じ世代の人として入ってもらえ。幾つかのこの属性に期待がかかっています。それからもう一つは、補助をするだけけれども、教師から何も手当なしに入っていくのではなくて、事前と事後に担当教員との連携、フィードバックが入るといったことですね。それによって、現場に立つものとしての実践経験を積んでいくということ。【スライド②-10】

日本語学習者に対する期待というのはまた今日はトピックから外れるので、また別にお話したいんですけども、TA について私たちがどんなことを期待しているかということ、まず今回、中級日本語を担当する TA には、日本語教育を専攻する大学院生に入ってもらえということですね。日本語教育が専攻じゃない人じゃなくて、やっぱり日本語教員になりたい人で、本気でやろうとして、大学院生になっている人に、TA として入ってもらえ。その期待にはどういうことを具体的にかけているかということ、将来は日本語教員になってほしい。だから、その下地に TA としての経験を積んでほしい。教員になるということはつまり、教育をする実践者であり、それから大学院生ですから、研究する実践者になってほしい

ということですね。教育と研究の実践者になってほしい。そのためには、実際にプロになってから、教育、研究の実践者になるんじゃないなくて、教師の卵の状態から成長する教師の実践を重ねてほしいという期待をしています。【スライド②-11, 12】

そういったことを、どんな風にも実際の仕掛けの中に取り込んでいるかということ、まず具体的には授業の前後の担当教員による指導があるということ、先ほどお話ししたと思うんですけども。それから、フィードバック活動なんですね。後で谷先生、藤田先生から報告があると思いますが、導入をしたり、それから説明をしたりとか、それから学習者の宿題を見て、どういう風に返していこうかということに対して、主体的な取り組みをしてもらう。それから、教育、研究の実践者なので、自分自身がどういう実践をしたかということ、振り返りを記録して、アクションリサーチに繋げてほしい。そういったことを考えています。これが教育活動の方なんですけれども、もう一つは研究活動にもきちんと繋げてほしい。【スライド②-13】

先ほど、アクションリサーチというのをお話ししたと思うんですけども、アクションリサーチ、実践研究というのは、自分の中だけで実践をして振り返りではなくて、やってみた、振り返った、そこから得たものがある、それを発信する。発進したところでまた、他の人から意見をもらったりして、インスパイアされるものがある、次の実践に繋がっていくという、リンクがあるんですけども、それを、TAをやったら、すぐ、そういった実践研究にも取り組んでいくということを考えています。

こちらの写真出ているのはですね、2012年のTAの第一号の野尻さんの写真です。野尻さんの場合は、一年TAを経験した後に学内でポスター発表をやってみて、その後、その二週間後くらいですかね、今度は小さな学会なんですけれども、そこで学会発表をやるというふうなことをして、その自分がやっていることを、記録して、そこから研究のシーズを見つけ、そして外に出て行ってみようということをしました。発信して、そこからまた学んだことをもって、一年間スロベニアに行って、またTAの経験を積んでいるという、そういった流れを作っていくということがあります。【スライド②-14】

今日皆さんに、前で報告する西内さん、それから三浦さんは、その2号、3号ですね(笑)。このまさに、期待の中の、仕掛けの中の研究活動のですね、自

分たちが実践したところまであって、そこから何を見つけたかについて発信してもらおう。そういう機会としています。

ということで、中級日本語を、今、立教のこの科目が抱えている TA に対する、この科目のミッションというのが二つある。日本語学習者の日本語力の向上に寄与すること。もう一つは TA を育成すること。なんですけれども、日本語力の向上に寄与する、これでちょうど三年を今、経過するところなんですけれども、学習者に対するアンケートであるとか、oral proficiency interview test を行って、どんな風に伸びているかということ、今検証している最中です。

TA の育成については、実践研究と、発進、振り返りというのを積極的に奨励してですね、今回のような企画を積極的に企画して投げかけ、呼びこんで、それから今回、また野尻さんの企画とまた違うのは、野尻さんは自分でやって、ポスター発表をするという形態を取ったんですけれども、今回二人は発表しながら、違う目線の先生方にこういう場で意見交換をするという、そういった機会を設けるということですね。色んな形での発進というのが可能なので、引き続きやっていきたいという風に思っています。情報共有もやっていきましょう、ということですね。では、私の発表はここまでで、次、どんどん行きたいと思います。【スライド②-15】

【スライド②-1】

立教日本語教育実践学会 パネルディスカッション  
「日本語科目におけるTAの活用の可能性と課題」(2014/09/17)

**学習者の多様性を生かした  
日本語授業のデザイン**

—「中級日本語」の新設とTAの活用—

異文化コミュニケーション学部・日本語教育センター  
丸山千歌

【スライド②-2】

**特別外国人学生の日本語履修  
(2014/09/09後期現在)**

\* **プレースメント受験対象者**

新規(特別外国人学生+大学院生)	111名
継続(特別外国人学生+大学院生)	47名
合計	158名

**日本語科目履修者数(のべ) 上の約2-2.5倍**

【スライド②-3】

特別外国人学生向け 日本語プログラム (「中級日本語」新設前:2011年度後期)								
レベル	総合クラス		技能別クラス				内容重視クラス	
上級 ↑	8		日本語論文作成 日本語論文読解 キャリアアジャパニーズ ビジネス日本語口頭 ビジネス日本語 (文書)				日本の文化・社会 日本語の語相	
	7		聴解会話	文法	読解	作文	JL&L C	
	6		聴解会話	文法	読解	作文		
	5		聴解会話	文法	読解	作文		日本語演習 3
4		聴解会話	文法	読解	作文			
↓ 初級	3	J 3	J 3 S					日本語演習 2
	2	J 2	J 2 S					日本語演習 1
	1	J 1	J 1 S					
	0	J 0						

【スライド②-4】

## 「中級日本語」新設の背景 レベルごとの科目展開

個々の学生が限られた時間で効果的に必要な語彙や文型を習得するためのシステムであり、初級レベルの学生や日本語能力試験の受験を目指す学生にとっては非常に効果的

現実世界のコミュニケーション状況(言語レベルが異なる参加者によって構成される)においてもコミュニケーションを続けていく力も必要

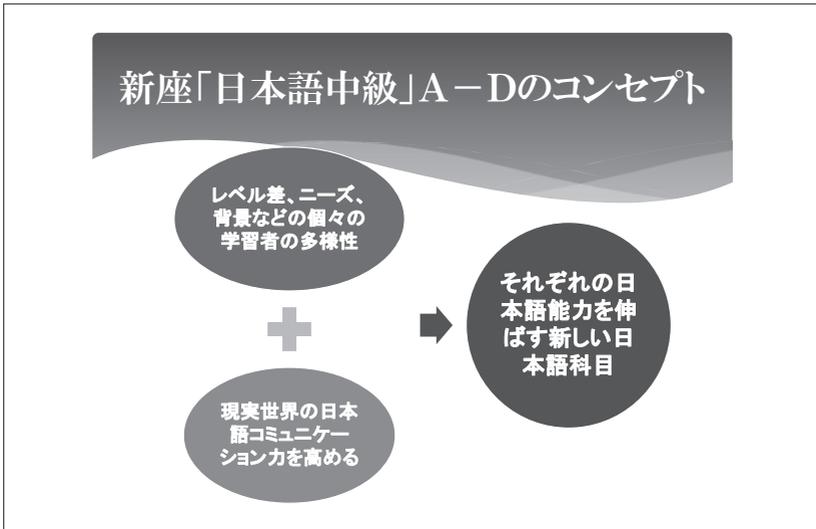
【スライド②-5】

## 「日本語中級」の設置

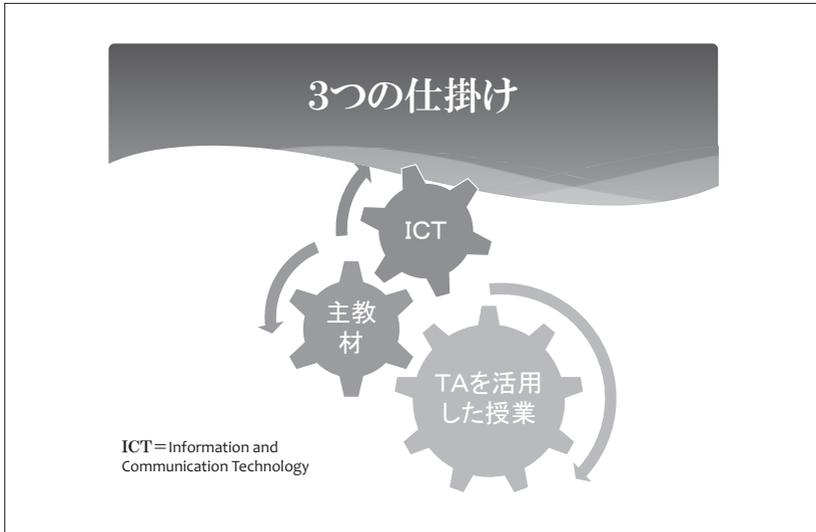
レベル	総合クラス	技能別クラス				内容重視クラス	
上級↑	8	日本語中級 A~D	日本語論文作成 日本語論文読解 キャリアアジャパニーズ ビジネス日本語口頭 ビジネス日本語（文書）				日本の文化・ 社会 日本語の諸相
	7		聴解会話	文法	読解	作文	日本語演習 3
	6		聴解会話	文法	読解	作文	
	5		聴解会話	文法	読解	作文	
↓初級	4	聴解会話	文法	読解	作文	日本語演習 2	
	3	J 3	J 3 S				日本語演習 1
	2	J 2	J 2 S				
	1	J 1	J 1 S				
0	J0						

JL&LC

【スライド②-6】



【スライド②-7】



【スライド②-8】

### 仕掛け(1) 授業に適した教材

- \* ACは読解中心、BDは聴解中心
- \* テーマ：日本の文化や社会に関するもの
- \* 各履修者の日本語力に合わせた数種類の教材開発
  - ⇒ 予習前提
  - ⇒ 授業内では主に発信活動

【スライド②-9】

## 仕掛け(2)ICT

<http://nihongo.rikkyo.ac.jp/>

各履修者の語彙レベル・文型レベルに合わせた教材開発

【スライド②-10】

## 仕掛け(3)TAを活用した授業

- \* 授業活動補助(1)
  - 日本語教育を専門とする者として
  - 日本語母語話者として
  - 日本文化を背景にもつ者として
  - 学生として
  
- \* 授業活動補助(2)
  - 教員からの指導に基づくフィードバック活動への取り組み

【スライド②-11】

## 日本語学習者に対する期待

- \* 本日のトピックから外れるので機会をあらためて  
...

【スライド②-12】

## TAへの期待

- 「中級日本語」を担当するTA
  - ＝日本語教育を専攻とする大学院生
  - 将来は日本語教員に
  - つまり教育研究の実践者に
  - TAの段階から「成長する教師」の実践を

【スライド②-13】

## TAの育成(1) 教育活動

- \* 授業前後の担当教員による指導
- \* フィードバック活動への主体的な取り組み
- \* 振り返りを記録したアクションリサーチの実行

【スライド②-14】

## TAの育成(2) 研究活動



2013年5月25日 学内でのポスター発表  
2013年6月8日 第21回小出記念日本語教育研究会  
そして 本日…

【スライド②-15】

## 「中級日本語」のミッション

\* 日本語学習者の日本語力の向上に寄与する

→ 現在検証中（アンケート、OPI）

\* TAの育成（教育研究実践者育成へ）

→ 実践研究と発信、振り返りの奨励  
教員とTA相互の振り返りと情報共有